
ゲーたら男とオカルト女

中田中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グーたら男とオカルト女

【Nコード】

N8471E

【作者名】

中田中

【あらすじ】

特にこだわりもない「僕」を中心に友情やら愛情やらなんやらを詰め込んでみよう、と言うお話。日常にある幸せってなんだろう。

その1

1

朝目覚めるのはだいたい僕の方が早い。彼女もだいたい朝10時には起きるが、お互いにフリーターともなれば朝10時でも十分に早いと言うことが言える。

その30分くらい前。僕は彼女の歯ぎしりで目が覚める。この世のものとは思えない騒々しい歯ぎしりの上に、半々でかけていたはずのタオルケットが全て奪われている。僕の下半身は若さを主張している。これがデフォルト。通常の流れだ。波打って起こさないようにゆっくりベッドを抜け出てからは1つと息を吐き出す。たばこでも吸えれば今は吸うタイミングなんだと思うけど、吸ったことはないので分からない。

珍しくこんな時間から背後でもぞもぞと音がした。

「んおはよ」

おきたての気だるい声が僕に向けられた。鼻屑目を抜きにしても彼女のおきたての声はかわいすぎると思う。大体の男は起きたてに弱いと思うのも、彼女の存在が大きい。

「おはよう。歯が削れそうだったよ今日も」

歯ぎしりの状況をそれとなく伝える。よくある日常の光景、ではないのだろう。

「ふーん」

ここで彼女は照れたり恥ずかしがったりしない。それが悲しくもあつたり、それとなく嬉しかったりもするから不思議だ。

「今日バイト？」

彼女の問いに頷く。

そのままそつとベッドに戻って抱擁した。

「や」

胸をぐいっと押され拒否される。本当に拒否してるわけでもなさそうだったけど、怠いのか面倒なのか、あまり乗り気でないのは伺いしれた。

「かわいいんだから」

そう呟いてから僕は顔を洗いに行った。

彼女はふーんと口ずさんでいた。歌でも歌うように。

顔を洗いながら考えることと言えば明日に迫った彼女のふるさとの帰省だった。なぜだか僕もついて行くらしい。最初は拒否していたけど彼女がもうものすごい頑固で、最終的には根負けした。ただ、この何も社会的価値もない体をどう説明したらいいのか見当がつかない。

彼女曰く会いに行くのは結婚した次女夫婦のところだから心配ないと言う。それでも僕は嫌だったが、親に挨拶するよりは気が楽だったのは事実だった。ごめんなさい親たち。こんなに不甲斐なく甲斐性もない男で。

心の中で神にだけは祈っておいた。一応。念のため。

そんなことを考えているといつのまにか身支度が整っているから不思議だ。歯を磨き顔を洗い適当にワックスを付け終わっている。習慣という奴は恐ろしい。

部屋に戻る前にミニキッチンで牛乳を一杯飲み干す。磨り硝子の窓からは朝日がこぼれている。空の色を見る限り、今日は暑くなりそうだ。

部屋に戻ると彼女は瞑想を始めていた。朝起きて一番最初にすることが瞑想だと言う女を僕は他に知らない。瞑想中は静粛に。

これは僕たちの暗黙の了解だった。僕は息を潜めカーテン越しの明るみを見つめる。

この、少し現実離れた10分は慣れてくると意外に神秘的で和んでくるから意外だ。

彼女はあぐらのような形で、手をすつと下ろしたまま目をつむっている。どう見てもその姿は格好よかった。ほんとどう見ても様になっていた。ちんちくりんな体してるくせに。

「今日ミサに預かってくる」

どうやら寝てしまっていたらしい。

不意に聞こえた言葉に体がびくつと反応したかと思うと訳の分からない力で後ろにころんと転がっていた。

「あ？うん」

などによく分かってない感丸出しでとりあえず肯定しておく、彼女は再び今日ミサに預かってくる、と告げた。

「ん。いつてらっしゃい」

ようやくそれだけ言葉を発すると、急に上から抱きついてきた。さつきは息そうだったのに、今は違うらしい。

そんなことを考えながら、しっかり体は彼女を抱きしめているから不思議だ。

その2

2

チリチリと体を焼かれながら駅までの道を歩いていると、このまま職場ではなくどこか遠くにふらふら飛んでいきたい気持ちになるから困る。一度はその気持ちに我慢できずに電車を乗り越してしまつたこともあつた。いやほんとはちよつと格好つけて行つてみようと思つて1駅先で我に返つただけだ。地味に二分遅刻して微妙な空気になつたのを覚えている。

結局僕は大した冒険もできず、大した夢もないまま時を見送つていくのだらうと思つた。

駅につき、改札を抜けると丁度すぐに電車がホームに滑り込んでいく。僕が階段を下り終える頃に扉が「っ」と痰を吐くように開き、いつもいる細身のスーツ姿の男と灰色スーツ姿の女をみつける。こんな昼時に二人そろつて何をしているのか、少し気になつたりするけど、小さなことを気にしすぎると頭が休まらなくなるので、二人はスーツコップレカップルと言うことで脳内ではなつとくしている。

平日の昼間の上り線なのに、乗車率は100%ちよつとあるのか、微妙に空間のあいた座席とも隙間とも呼べないような空間がちらほらあるだけで、電車はにぎわっている。どうしても座りたいのならすいませんと座席を詰めるようにお願いしなければならぬので、素直にドアの横にある手すり付近に立つ。間延びした景色が、流線型に流れていくのをぼーつと見送りながら相変わらず逃避感と言いか厭世観にすごく悩まされていた。

隣の優先席で母親に抱かれている赤ちゃんがこっちを見つめているのを窓の反射越しに見つける。

恐らくは女の子であるその子の眼差しはなぜだか一心に僕の背中を見つめていた。

どうしてこんなに純真な眼差しなのだろう。

こんな視線を向けられると、何か自分の犯してきた罪を懺悔してしまいたいような気分になる。もしくは、強い罪悪感に苛まれる。あ、どうしてだろう。僕の思考にはいつの間にか宗教的というか神秘的なものを積極肯定している何かがあるような気がした。それが彼女と因果関係があるのか、よく分からない。

電車に乗って10分程で職場の最寄り駅に着く。

割と乗車も下車も多い中級都市と言った感じのこの駅はさすがに整備が整っている。

地下一階相当のホームから長いエスカレーターを二階分登り改札を抜ける。人の流れが西口に抜けていく中、僕は反対の東口を抜けて階段を下りる。小さいタクシー乗り場と宝くじ売り場の間にある寂れた商店街を歩き、徒歩3分ほどにあるスーパーに入る。長つたらしく退屈な説明ももう終わる。すべてはこのためだ。スーパーポプラ。ここが僕の職場だ。

その3

3

従業員通路とは名ばかりの民家のドアからバックヤードに入ると、ちょうど同じシフトだった坂西に出くわした。坂西はうちの男たちから目の保養要因第一指名を受けているかなりの美人だ。

「おはよ」

「うい」

抑揚のない坂西に合わせて控えめに返事をしておいた。『ポプラ』の正装は普段着の上に緑色のエプロンを付けるだけなので着替えが男女分かれることはない。よって今からバイトが始まるあと15分ほどは二人きりで過ごさないといけないことになる。

坂西は早々にエプロンをつけて、小さなソファに腰を掛けた。ロッカーが隣どおしなのをしまってなのか、いつもより着替えがてきぱきしていた。こういうところは素直に有り難いと思う。隣のロッカーは開閉やら何やらとにかく気を使うものなのだ。

「天海つてさ」

タバコをくゆらせながら坂西が突然口を開いた。内心びっくりしたが、悟られないようにエプロンに腕を通すことに集中してみた。

「変だよね」

「は？」

エプロンをただししながら素直に思った言葉が口をついていた。即ち、は？だ。

「なんかよく分かんないけど、変だよ」

出ました。女の勘的発言。なんかよく分かんないけど。こんなこと言われても返す言葉がないってもんだ。

「まあ、変と言われて悪い気はしないのは変だと思う」

ソファの横にある簡易いすに腰をかけた。

100均なんかでよくみるパイプ折りたたみ式の簡易なやつだ。

位置的にどうしても坂西の背中を見ることになるのだが、髪をあげた坂西の首もとはちょっと反則なんじゃないかと思う。他の奴らが目の保養タイムと言うのも頷ける。

坂西はそれきり僕と話をしなかった。テレビをみたり携帯をいじったりしていた。僕はといえば、手持ち無沙汰を感じるばかりでどうにもばつが悪い。坂西はいい奴だし綺麗だけど、何か距離を感じる。それは僕がそうさせているのかもしれないし、坂西がそうしてるのかもしれない。どうなんだろう。

少ししてから店内と控え室を繋ぐ扉が開いた。

中に入ってきたのは日に焼けた黒豚のような男、寺田だ。

「おー坂西ちゃんじゃないかあー奇遇だね。おっはよ」

「トン、おはよー」

寺田は色黒のぽっちゃりと言うことからクロ、とかトン、とか呼ばれている。それにしてもこいつ、見計らったかのようなタイミングで現れては、あつと言う間に坂西と談笑を始めている。

坂西も僕の時とはだいぶ違った笑顔で楽しくはなしているから、僕の手持ち無沙汰感余計に募った。せめて僕がソファに腰をかけていればテレビを見ているふりができたけど、この位置では下手にそっちを向いたら色々さとられてしまうかもしれない。そんなことを考えると自然と携帯電話に手がかかっている。何も無いのを知りながら携帯を開くときは、無性に切なくなるもんだ。

「天ちゃんなにしてんだよ。こつちこいよー」

寺田がそう言った。皮肉な調子なら寺田を嫌うこともできただろうけど、生憎寺田はそんな奴ではない。本当、疑いすぎて疑いたくなる程明るくて無邪気な奴なんだ。

「お、おう」

センターに問い合わせたけれど、案の定メールはなかった。パチンコと携帯を閉じてから寺田に言われるがまま近くの丸イスに座り直した。

「なー天ちゃん。坂西ちゃんは可愛いと思う？綺麗だと思う？」

「は？なんだよそれ。」

いきなりの質問で言葉がでなかった。と言うかだいたい本人の前で

なんの話をしてるんだ全く。

「いやー、ね。今店内アンケートを取ってるんだよ。で、今回のテーマは坂西ちゃんなの」

寺田は悪びれずにこにこしている。これが最年少19歳の力か、なごと思いつながら答えに窮しているとさつきより大きい扉の音が僕を助けた。

「天海と坂西…二人ともいるな」

副店長の増田さんが入ってきた。

「あ、おはようございます」

僕がそう言うのに続いて坂西も挨拶をした。

「えっと、天海さんレジ袋どこでしたっけえー？」

突然そう言ったのは寺田。妙に甲高い声が、わざとらしくて笑ってしまった。僕だけではなく、坂西も。そして増田さんも。

「お、寺田までいたか。ちょうどいい。二人に頼もうと思ってたんだが、寺田と天海で荷降ろししといてくれ。本当寺田はいつも『いい所』にいるからな、助かるよ」

増田さんはそう言つと寺田の肩を叩いた。

「レジ袋は俺が持ってってやるからな」

したり顔の増田さんに照れ笑いするしかない寺田。

それを笑いながら見てる僕と坂西。その時坂西と今日初めて目があ
った。

笑顔の坂西はやっぱり可愛いと思った。

その4

4

「ポプラ」は個人経営の割には儲かっているらしく朝一番と昼過ぎの二回トラックで搬送される食材の荷降ろしがある。僕が言うのも何だが、ポプラは特に商品が安いわけでもない。いくつかの商品、大体はティッシューパーかトイレトーパー。食材なら牛乳や豆腐を卸値ぎりぎりですりばいて客寄せパンダにしているのが現状だ。そんなことは大体どのスーパーでも行っていることで、とりたてて商売を工夫している様子はない。確実にいえることは運が良かった。開発著しい西口にはいくつかの新規スーパーやコンビニ、百貨店まで出来たのに対し、東口は都市開発に伴って新規参入したのはコンビニ一つだけ。他は長年競り合っている、と言うか共存している大手スーパーが1店舗あるだけで、かなり安定している。でも、増田さん辺りはこの安定は長くは続かないと見ており、何かいろいろと考えているようだ。おっと、肝心の話をお忘れていた。なぜ、今僕がこの話をしたかと言うことだ。それはつまり荷降ろし中に寺田が発した

「天ちゃんはいつまでここにいます？」

と言う素朴かつ胸を突かれる質問に関係する。

いつまでここにいますか。

そう、それが今の僕に一番必要な答えだった。

僕はこの仕事が特に好きというわけではない。まだ一年と少ししか働いてないが、なんとなくマンネリすら感じる。

ただ、やめると言う気も特に起きない。それどころか、増田さんの

構想する店舗向上の計画の中に僕がすっかり組み込まれていると言
うところが大きい。大きすぎるくらいに大きいのだ。

「さあ、わからないな。寺田はどうなんだ？あんまりぼけっとして
ると俺みたいになるぞ？」

寺田も僕と同じ高卒からのフリーター組だ。なんの目標もなくだら
だらとしているとじきに僕みたいになる。いやでも、寺田は明る
い。だが、そんなことを寺田にいったら真に受けてよりふらふらし
かねない。ここはくぎを差すくらいでちょうど良いはずだ。

「さあ、どうっすかね。分かんないですよ、先のことなんて」

せつせと荷降ろしをしながら、寺田は何とも諦めたように言った。
それに対し声をかけてやるべきなのが僕の状況なんだろうけど、僕
もまた寺田と同じような状態なわけで。

「だよな。まあ寺田はまだ若いし何にでもなれるわ」

そう言うことしか出来なかった。僕が寺田くらいのとくに周りから
よく言われた言葉だ。なんにでもなれる、可能性は広がっている。
それをまるつきり嘘だとは思わないけど、少なくとも何かをしたい
人間にとっては可能性が無限なのであって、何もしたくない人間
には寧ろどんどん狭まるばかりだ。

「そうっすよね。天ちゃんもまだまだ若いんだし二人で頑張りまし
ようよー」

「ああ、だな」

若さなんてあんまり関係ない。やる気と行動力。それだけあればきつと空だって飛べる。

「つか今日あちーなまじで」

寺田に言ったのか独り言なのか自分でもよく分からない。なんとなく、そう言っただけを終わらせたかった。

「そうですねー最近暑すぎますよ。あ、あれ知ってます？なんか昨日テレビで見てたんですけど坂口敬子って……」

それから僕は延々と寺田のゴシップを聞かされ続けることとなる。アイドルがどうした、俳優がどうした、離婚だ結婚だなどうんぬんかんぬん。

どうして気候の話がそっちに流れていったのか、知る由もない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8471e/>

ゲーたら男とオカルト女

2010年10月28日08時29分発行